

新しき俘虜と古き俘虜

大岡昇平

大岡昇平著

新しき俘虜と古き俘虜

創元社

新しき俘虜と古き俘虜

昭和二十六年四月十日 初版印刷
昭和二十六年四月十五日 初版發行

定價二〇〇圓
地方賣價二〇五圓

著者 大岡昇平

發行者 東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
矢部良策

印刷者 東京都新宿區改代町二四
松浦元

發行所 東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
株式會社 創元社
(大阪市北區橋上町四五)

電話茅場町二〇六四・四〇八三・五二六三
振替東京一五六五・大阪五七〇九九

印刷 理想社、製本 鈴木

萬一落丁・亂丁がありましたら取替へます

目次

建設……………三

外業……………四九

八月十日……………九一

新しき俘虜と古き俘虜……………三

俘虜演藝大會……………一五

歸還……………一五

或る監禁状態を別の監禁状態で表はしてもいゝわけだ

デフオー

建

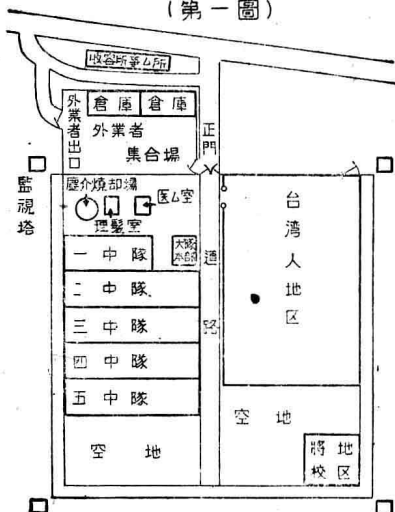
設

レイテ島タクロバン北方四軒パロの新收容所は、方二百米の有刺鐵線の柵に圍まれた正方形の地面で、北に開いた正門から幅四米の道路がそれを貫いてゐた。その道の門から入つて左側にまた有刺鐵線の柵が沿ひ、縦長の三分の二を行つて左折し、敷地極限まで到つてゐる。敷地中この柵で區切られた地面に臺灣人の俘虜が住み、残つた鋸形の地面に日本人の俘虜が住む。たゞし敷地は當時日本人約千二百人、臺灣人約五百人には廣すぎ、殊に日本人地區の後部一帯は草の生えた空地のまゝに残された。鋸の手に臺灣人地區の裏手へ廻つた奥には、さらに一廓が有刺鐵線で圍まれ、約五十人の日本の將校が隔離されてゐた。

昭和二十年六月の末、我々がこの新收容所に移つた時、所内はやつと地均しと二三建物の棟上げを終へただけであつた。我々は濕つた赭土にテントを張つて住み、以來一ヶ月の間に、半永久的に我々の宿舍たるべきニッパ小屋初め各種施設を建設した。

我々は米軍の編成に準じて中隊に分れてゐた。各中隊人員二百三十三名、五箇中隊が中央通路

(第一圖)



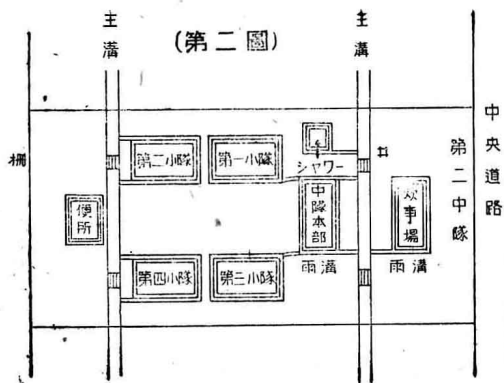
右側を横に區切つた中隊地區を占居した。大隊本部、醫務室、理髮室、塵芥焼却場は同じ側の入口附近にあつた。

文字をもつて對象を書き盡すべき文學者として、圖形の助けを藉りるのは屈辱であるが、學校の進歩的教育によつて、視覺的に甘やかされた現代の讀者は、我々が文字をもつて記述する天然人工の事物の配置を、まづ圖形として腦裡に描くと信すべき理由があるから、いつそ圖形を入れてしまつた方がお互ひに手間が省ける。では左がわが收容所の略圖である。(第一圖)

中隊地區の境界は假りに線を引いてあるが、これは現代の圖形文化の因襲に従つたまでだ、無論垣があるわけではない。外部にある米軍の施設は、圖形中に文字を介入させて示した通りで別に説明を要さないであらう。醫務室等所内の一般的建物の機能も、ほど讀んで字の如くであるが、詳細はいづれその效用を發揮さすべき俘虜の勞働と共に、追つて説明するとして、まづ俘虜

の生活と密接な關係のある、中隊内の諸施設の詳細から始めよう。

各中隊地區に我々は次のやうな建物を建設した。(第二圖)



各地區は幅三十米縦百米である。地區内に大隊本部

を容れてゐる第一中隊を除き、各地區共中央道路から約十五米が空地でいはゞ前庭をなしてゐる。中隊の使用する敷地は炊事場から始まり、それと中庭を挟んで對蹠する便所までである。その間に圖に示したやうな配置で、中隊本部、シャワー、四つの小隊小屋が建てられた。

我々が移轉した時は、三中隊まで炊事場完成、中隊本部の棟上げがすんでゐただけであつた。我々はまづ圖の中庭に當るところにテントを建てゝ住み、逐次周圍に我々の住居たるべきニッパ小屋を建造して行つた。「うら枯れしニッパアをもて葺くなればニッパア・ハウスと申すやうなり」と俘虜の中の歌人が歌つた。

ニッパとは幹を持たない椰子の一種で、葉はココナツ椰子のそれなどより柔軟であるため、それを二三尺に綴つたものを單位にして屋根に並べる。別に枯れたのを集めたわけではなく、最初は随分緑したゝるやうでもあるが、やがては枯れて茶褐色を呈して来る。ニッパ椰子の葉で葺くから、ニッパ・ハウスと呼ぶことには間違ひはない。

收容所の我々の住居は、最初は米軍規格のテントであつたが、戦争の終焉の見通しのつかないまゝに、便所を除き半永久的のニッパ・ハウスを俘虜自身に建造させるのが、米軍の方針となつたらしい。

建物は全部所謂切妻形である。これは周知のやうに左右二面の屋根のみを持つ簡単な造りで、別に米軍の指定によるものではなく、俘虜の中の大工が勝手に設計したものである。(因みに比島人のニッパ・ハウスは多く四面に屋根を持つてゐる。)

まづ椰子の幹を一丈ばかりの長さに切つた丸柱を、二間をきに二列に建て並べ、「三角」といつて、竹を鈍角の頂點を持つた二等邊三角形に組んだものを、各々相對した柱に渡す。その頂點を貫いて竹の梁を通し、それから左右にやはり竹の垂木を並べ、同じく竹の母屋で繫げば、この建物の骨格は出來上るのである。あとは屋根と、建物の前後に露出した「三角」をニッパで葺き、廂を出し、各「三角」の底邊を二本の竹の柱で支へ、周圍に割竹で腰張をほどこせばよい。通路

は「三角」を支へた中柱の間で建物を貫く。

これが中隊本部及各小隊小屋の基本形であるが、炊事場のみ稍々異なる。「三角」を支へる中柱を缺き、入口は裏一方のみ、前面は全部腰張にして、食糧を分配する臺を設へてある。

資材が米軍によつて運び込まれるにつれ、俘虜は元氣に、建築にかゝつた。一二中隊の俘虜達は既に舊收容所で二三のニッパ・ハウスを建てた経験者である。中でも特に敏捷な者が屋根へ上り、歌ひながら竹材を針金でくくり、ニッパを敷く。各中隊、更に各小隊が競争になつた。入所日が浅く虚弱で未熟な俘虜を抱いた三四五中隊は暇取つたが、それでも一ヶ月の後には中隊全部が完成した。

この間俘虜の外部へ出る米軍の作業（外部作業、略して外業と呼んだ。以下この呼稱を用ひる）は中止されてゐた。もつとも作業は簡単な名目的なもので、どう考へても我々の享受してゐた衣食住プラス三弗の俸給、さらに一日八仙の作業手當に値するものではなかつた。外業では我々は過分に支拂はれてゐた。しかし自分達の住居を建造するといふ作業では、我々は立派に一つの仕事をした。つまり住居はいづれにしても我々に與へられるものである以上、その建造に協力することは、幾分でも我々の負擔を軽減したわけである。

更にかうして自分達の住むところを自分で建造するといふ仕事の性質から、我々舊日本軍人の

間に初めてデモクラシーが生れた。つまり各小隊長、多忙の口實で中隊本部、炊事場の建造に役を出すことを拒み、各自その構成員が働くほかはなかつた。前述のやうに一二中隊は棟上げをしてあり、内部の盛土と周囲の腰張りを作ればよかつたが、あとの三箇中隊は全然手をつけてなかつたから、これは特權に馴れた幹部達にとつてかなりの打撃であつた。

殊に悲惨であつたのは、大隊本部であつた。舊收容所では日本人代表者イマモロ（今本の米軍の訛りである。我々は半ば愛情半ば輕蔑を籠めて、この訛りを踏襲してゐたので、この記録でもそれを用ひる）は米軍との折衝を專斷して、擬專制的權力を享受してゐたが、新收容所に移るのを機に、所内が中隊組織に改組され、各中隊に米軍下士官が配屬されることになつて以來、權力は分割され減少した。今や彼は大隊長となり、象徴にすぎなくなつた。

かつて現在の中隊長、小隊長等の幹部を一棟に集めてゐた大隊本部は、今は七人の彼の直屬スタッフを持つにすぎなくなつた。つまり副長オラ（織田である。イマモロの場合に同じ）と書記中川、通譯の櫻井、給仕二名である。そしてこれだけの人數で宿舍を建造しなければならなかつた。これは事實上不可能であつたから、彼等は結局テントの周圍に垣を廻らすに止つた。イマモロがぷりぷり怒りながら二人の給仕を指揮して割竹を地にさしてゐる光景は、彼の權力失墜の最初の徴候であつた。

彼の没落の原因であつた中隊附サージヤントは我々が各ミニッパ・ハウスを建造し終つた頃到着した。彼等は一箇中隊に一人づゝ配屬され、毎日晝間を中隊本部に詰めて米收容所長の諸指令を傳達し、遵守を監督した。彼等はまた朝夕中隊毎に點呼を取つた。これも從來イマモロの重要な補佐的役目の一つで、彼の勢威の有力な源だつたものである。

私が通譯として屬した第二中隊のサージヤントはウエンドルフといふドイツ系米人であつた。金髪碧眼、丈は低く、むしろフランス人を思はせた。私は彼が南部ドイツの農民の出であらうと空想した。(Wendorf の Dorf は村を意味する)「ドイツ人たる君がドイツと戦ふのは變な氣がしないか」といふ私の問ひに對して「私達がアメリカへ來たのは随分昔だ」と彼は答へた。

彼の職業はデトロイトの自動車工場の事務員で、召集されて既に三年ださうであるが、一般にあまり兵隊臭くない米兵の中でも、特に兵隊臭くなかつた。高射砲隊員としてキスカ、マーシャルと轉戦した後、この閑職について、今はたゞ召集解除の日を待つてゐるだけらしい。

彼は大隊本部と我々の關係をすぐ理解し、我々に與してイマモロを無視するのを面白がつてゐるやうであつた。例へば我々が毎朝米軍倉庫から受けて夕刻返す要具(鶴嘴、シャベル、鑿刀等。これ等は兇器であるから收容所内に止めることは許されない)の割當も、從來はイマモロが宰領してゐたが、これもサージヤントの手に移つた。毎朝我々は彼にメモを貰つて門外の倉庫へ受領

しに行つたが、これは各中隊共勝手に要求したため、すぐ数が足りなくなつた。大隊本部は別に直屬の米兵を持たないため、却つて不利になつた。

しかし後大隊本部の前を要具を擔いで通る俘虜を、ヒステリーを起したイマモロが強襲して、要具を道路上に散亂させた事件を機に、イマモロの懇願が效を奏し、要具だけはイマモロが一括受領し、各中隊に分配するやう、收容所長から中隊付サージアントに指令が出た。イマモロはまた威張り出したが、我々も負けてゐなかつた。サージアントにエキストラ要求書を發行して貰つてイマモロを惱ました。イマモロが米軍の倉庫主任を後楯に頑張ると、ウェンドルフが直接米軍の倉庫主任にかけ合ひに行つて、無理矢理に要求數を取つて來た。彼等の間にも、我々とイマモロに似た關係があつたのかも知れない。

我々のイマモロに對する鬱憤はかなり晴らされた。彼は永らく抵抗してゐたが、やがて軟化し、我々を「お前ら」ではなく「あんた方」と呼ぶやうになつた。俸給生活者上りで元來懇懃なオラは「あなた方」といつた。

中隊別に食糧を分けることだけは依然イマモロの手にあつたが、これは彼が從來のやうに、古い俘虜の多い一二中隊に偏愛する理由がなくなつたといふ事實によつて、却つて公平に行はれた。かうして舊收容所における日本的專制は各中隊にサージアントの配屬されたことによつて消滅

したが、中隊内部では必ずしもさうは行かなかつた。中隊長はじめ各小隊長、炊事長などが依然としてボスであつた。しかしその権力は舊收容所でイマモロが米收容所長の威を藉りて振つてゐたそのほどには到らなかつた。サージヤントが常駐して直接指令し監督してゐたからである。彼等の役目はむしろいかにその指令を俘虜の利益のために誤魔化すかを誇示して、俘虜の怠惰に媚びて人氣を博することにあつた。彼等がボスであり得たのはかういふ人氣に基いてゐた。そして憎まれ役はサージヤントの代辯者たる通譯の方に廻つて來た。

俘虜一箇中隊 Company は左の構成を持つ。

中隊長・Leader

中隊本部 Headquarter or Overhead

小隊(四) Platoon 長を含み

五三×四〇二二二

計 一三三

小隊はさらに各々長を含み一三名より成る四箇分隊に分れてゐる。

中隊本部の職制次の通り。

書記 Clerk

補助 C.Q. (Charge of Quarter)

炊事員 Cook (長 Mess-Sergeant 1を含む)

衛生兵 Medic

清掃係 Sanitation

理髮師 Barber

給仕 Boy

計 二〇 二 二 二 二 八 三 一

わが第二中隊の中隊長は樋渡といふ海軍兵曹である。彼は十月二十五日早曉レイテ、ミンダオ間のスリガオ海峡に向つた第二戦隊に屬する驅逐艦の乗員で、同戦隊が壊滅した後、一晝夜泳いで米艦に救助された。レイテの海軍の俘虜は殆んどこの所謂「山城扶桑組」の生き残りである。樋渡は齡は三十二三歳、横須賀の電氣器具商である。よくいはれる海軍軍人の技術者性をそれほど誇張して考へる必要はあるまいが、兎に角彼は甚だ器用であつた。彼は地均し、溝掘り等の大さつばな作業から、各種大工仕事、木工細工、裁縫に到るまで、行くところ可ならざるはなし